

第64回 百年戦争とペストの時代

1 英仏百年戦争の勃発

- ・プランタジネット朝のイギリスは、フランスのギエンヌ地方を支配していた。
- ・また、毛織物業が盛んでイギリスと経済的関係が深い（ ）をめぐって、イギリスとフランスの対立が激化していた。

- ・1328年、フランスで（ ）が断絶した。
→フィリップ6世が即位し、（ ）が成立した。
- 1339年、母がカペー家出身のイギリス王（ ）は、フランス王位継承権を主張してフランスに戦争をしかけ、（ ）が始まった。



フランス王フィリップ6世

VS



イギリス王エドワード3世

カペー朝の最後の王から見て、フィリップ6世はいとこ、エドワード3世は甥にあたった。ただし一番の要因は、経済問題であることに注目しよう。



クレシーの戦い

左のフランス兵は、雨で濡れてクロスボウをうまく使用できなかった。一方で右のイギリスの長弓兵は、矢を連発してフランス軍を圧倒した。

- ・1346年、イギリスは、（ ）でフランスを撃破した。
- ・1356年、イギリスは、（ ）の活躍により、ポワティエの戦いで再びフランスを撃破した。
- ・またフランスの諸侯ブルゴーニュ公は、イギリスと結んだ。
→イギリスはフランスのかなりの部分を占領し、勝利に近づいた。



エドワード黒太子
伝説的な名将である。父より先に病死したため、王位には就いていない。

2 黒死病の流行と農民一揆

- ・14世紀の西ヨーロッパでは、（ ）が大流行し、人口の3分の1が死亡するなど猛威をふるい、農業人口も減少した。
→荘園における労働力確保のため、農民の待遇改善がはかられて農奴解放が進んだ。

- ・しかし百年戦争による重税、困窮した領主による農奴の締め付け（封建反動）が重なって農民の生活が厳しくなったため、農民一揆も激増した。
- ・1358年、フランス北部で（ ）という農民反乱が起こった。
- ・1381年、イギリスで（ ）という農民反乱が起こった。
※反乱の指導者のひとりである（ ）という聖職者の、「アダムが耕しイヴが紡いだとき、だれが貴族であったか」という言葉が有名。
- ・また（ ）の普及により戦術が変化し、騎士の重要性は低下していった。



死の舞踏

様々な身分の人間が、死者と踊っている。死はどんな身分の人間にも平等に訪れることを示している。ペストの大流行は、当時の人々の死生観に大きな影響を与えた。



ワット=タイラーの乱

ワット=タイラーは、乱の指導者のひとりであったが、国王のだまし討ちにあつて殺された。左の絵は、ワット=タイラーが殺される瞬間。その後ジョン=ボールも悲惨な方法で処刑された。

3 英仏百年戦争の終了

- 1429年、敗色濃厚となったフランスに救世主が登場した。
→神のお告げを受けたとする少女（ ）は、イギリス軍に包囲されていた（ ）を解放し、フランスを優勢に導いた。

◆（ ）（勝利王）（在位 1422～1461年）

- 1453年、百年戦争に勝利し、（ ）を除く土地からイギリスを追放した。
→百年戦争中にフランス国内の諸侯や騎士が没落したこともあり、フランスの王権はさらに強化され、国内はほぼ国王の支配下に入った。



シャルル7世

シャルル7世は、ジャンヌ=ダルクのおかげで国王になれたのに、最後は捕えられたジャンヌを見捨てた。愛人を毒殺するなど、冷たいところがある。第9回につながる。



ジャック=クール

シャルル7世に仕えた財務官で、財政の立て直しに活躍した。最初の資本家ともされるが、悪事に手を染めて金を稼いでいたため、反感も買っていた。



映画『ジャンヌ=ダルク』

難解な部分もあるが、当時の雰囲気がよく伝わってくる映画である。特に戦闘シーンは迫力がある。フランス語で撮ってくれば最高でした。



シャルル8世

◆シャルル8世（温厚王）（在位 1483～1498年）

- 1494年、シャルル8世は、対外進出を目指してイタリアに侵入した。
→イタリア政策を続けていた神聖ローマ帝国との間で、戦争状態となった。
※この戦争を（ ）という。

4 イギリスの内乱

- 1455年、百年戦争に敗北したイギリスでは（ ）と（ ）による王位継承戦争が起こった。
※この内戦を（ ）といい、多くの諸侯や騎士も戦った。



ヘンリ7世
優秀だが冷血なところも。第92回へ。

☆イギリス（ ）（1485～1603年）

◆（ ）（在位 1485～1509年）

- 1485年、ランカスター派のヘンリ7世が勝利し、テューダー朝を開いた。
- 百年戦争とバラ戦争で、イギリス国内の諸侯や騎士の多くが没落したため、テューダー朝の王権は非常に強かった。

